

氏名(本籍)	福田由紀(大分県)
学位の種類	博士(心理学)
学位記番号	博乙第931号
学位授与年月日	平成6年1月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	心理学研究科
学位論文題目	物語理解における視覚的イメージの視点の役割
主査	筑波大学教授 教育学博士 福沢周亮
副査	筑波大学教授 教育学博士 太田信夫
副査	筑波大学助教授 教育学博士 新井邦二郎
副査	筑波大学助教授 齋藤佐和
副査	筑波大学教授 桑原隆
副査	筑波大学教授 教育学博士 片岡暁夫

## 論 文 の 要 旨

### (1)本論文の構成

本論文は、5章、本文243頁、引用文献など75頁、図表71葉より成っている。

### (2)本論文の目的

本論文は、物語を読んだ際に読み手の中にできる仮想的の世界において、視覚的イメージの視点がどのような役割をもっているかを検討して、物語理解と視覚的イメージの視点との関係を明らかにすることを目的とした。

### (3)本論文の方法と結果

#### 1 視覚的イメージの視点操作における発達の様相に関する検討

##### (実験1・2, 調査1)

実験1では、視覚的イメージの視点を転換させることが必要な課題と不必要な課題の比較が、同じ被験者と同じ材料を用いて行われた。その結果、小学校低学年では、視覚的イメージを操作することと自体が困難であることが明らかにされた。また、視覚的イメージの視点転換操作を必要としない課題は、中学年まではできるが、必要とする課題は、高学年以上でないとできないことが明らかにされた。従って、視覚的イメージの視点の転換操作は、見えの操作とは異なる心的操作で、見えの操作だ

けよりも困難と認められた。

調査1では、小学校4・5・6年生を被験者とした結果、視覚的イメージの視点操作能力には、三つの側面、すなわち「視点の転換」「視点の統合性」「視点の許容量」のあることが明らかにされた。

実験2では、視覚的イメージの視点操作能力の各側面について発達の検討が行われた。その結果、小学校中学年までは、質問の視点が転換される場合の課題解決は難しく、さらに対象が動く場合の課題解決は難しいことが明らかにされた。また、高学年の段階では、視覚的イメージの視点操作能力は、明示的視点表現を含む文章を使用した配置に関する課題と有意性のある相関関係をもつことが明らかにされた。

## 2 視覚イメージの視点と文章の視点との関係に関する検討

(実験3～6)

実験3では、大学生を被験者として、絵を描く方法により、物語を読んでいる時に喚起される視覚的イメージの視点が検討された。その結果、視覚的イメージの視点と文章の視点は1対1の対応関係にないことが明らかにされた。

実験4では、大学生を被験者として、方法の検討が行われ、絵を選択する方法と絵を描く方法が比較された結果、前者の有効性が認められた。

実験5では、発達の観点から、視覚的イメージの視点と文章の視点との関係が、絵を選択する方法によって検討された。その結果、小学校中学年では、物語の始めから終わりまで、第三者的な視覚的イメージの視点が維持されているが、大学生では、視覚的イメージの視点と文章の視点が必ずしも1対1対応をしているわけではなく、物語を読み進める中で常に更新され、文章の視点によって視覚的イメージの視点が影響されることが明らかにされた。なお、高学年は上記両者の過渡期にあることが認められた。

実験6では、物語中の登場人物の立場に立つことの要因が検討された。その結果、小学校中学年では、立場に関係なく第三者的な視点をもつことが明らかにされ、高学年では、物語の主人公の立場をとる場合のみ、主人公よりの視覚的イメージの視点を設定することが明らかにされた。大学生では、いくつかの立場に立つ登場人物に即した視覚的イメージの視点を設定していることが明らかにされた。

## 3 視覚的イメージの視点が物語理解に及ぼす影響に関する検討

(実験7～12)

実験7では、小学生と大学生を被験者として、物語理解における文章の逐語的理解が検討された結果、視覚的イメージの視点は逐語的理解に影響しないことが明らかにされた。また、実験8では、大学生について、再生の手続きにより、実験7の結果が確認された。

実験9では、小学生と大学生を被験者として、物語の場面に関する理解および場面のつながりに関する理解について検討が行われた結果、視覚的イメージの視点は影響を及ぼさないことが明らかにされた。

実験10では、小学生と大学生を被験者として、異なる視覚的イメージの視点を設定することにより、

登場人物の気持ちへの推測と登場人物への評価がどのように影響されるかということについて、評定法による検討が行われた結果、年齢にかかわらず、視覚的イメージにおける見えが促進的効果を与えることが明らかにされた。

実験11では、小学生と大学生を被験者として、自由記述法により、実験10と同様の問題についての検討が行われた。その結果、発達の観点から考察すると、視覚的イメージの視点は、見え人物の気持ちから視点人物の気持ち、さらに両人物の気持ちをより深く理解することを促進することが明らかにされた。各登場人物の評価については、視覚的イメージの視点による影響は量的にも質的にも認められないことが明らかにされた。

実験12では、小学生と大学生を被験者として、物語全体の評価としてのテーマの理解と面白さに関して、視覚的イメージの視点による影響が検討された結果、いずれの問題についても、視覚的イメージの視点は影響を与えないことが明らかにされた。

#### 4 物語の仮想世界に関する仮説的モデルの提出

小学校中学年、高学年、大学生のそれぞれについて、物語を読んだ場合の仮想的世界に関する仮説的モデルが提出された。

#### 5 まとめ

以上により、視覚的イメージの視点は、物語を読み進めるという時間軸にしたがって次々と更新され、物語の要因（文章の視点、物語の構造）や読み手の要因（視覚的イメージの視点操作能力、立場、登場人物に関する既知知識）によって影響を受けることが明らかにされた。また、視覚的イメージの視点は、読み手の理解の各側面に選択的に影響を与えることも明らかにされた。また、視覚的イメージの視点操作能力の発達段階に対応して、より精緻化された仮想的世界が構築されることが明らかにされた。

## 審 査 の 要 旨

本論文は、視点という大変今日の問題を取り上げて、実証的に検討したところに意義が認められるが、特に、視覚的イメージの視点に問題を絞って、きめの細かな実験を行い、積極的な成果を得たところに大きな意義が認められる。

ただ、一方では、使われている用語や概念の整合性について更に検討の余地が認められること、提出されたモデルについても検討の余地があることなど、問題とすべき点も認められる。

しかし、最近の心理学の流れの中で新しいと考えられる主題の一つを意欲的に取り上げ、多くの実験によって実証的な成果をあげたことの意義は大きく、すぐれた研究と認められる。

よって、著者は博士（心理学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。